

## 【問題】（演習）

出典：鈴木日出男『源氏物語歳時記』／早稲田大学 商学部 98年

## 文章略解

『古今集』にも入っている「五月待つ花橘……」の歌は、元来は忘れかけていた昔の知己を思いだした感動を詠んだものであるが、『伊勢物語』の作者によつて、別れ去つた妻に懐旧の情を言い募る男の歌として解釈しなおされた。『伊勢物語』の作者は、「五月待つ花橘」の古歌に具体的な状況を当てはめることによつて、歌言葉としての「花橘」「『懐旧』の連想」にことよせた一方的な執着をリアルに描き出したのである。

## 現代語訳

昔、（ひとりの）男がいた。（その男は）朝廷の仕事が忙しくて、（家庭への）誠実な気持ちも尽くせないでいたころの妻が、「（私はあなたのこと）を）誠実に愛しましよう」と言う（別の）人について、（その男の任地である）地方の国に去つてしまつた。（後に）この（元の夫であった）男が、宇佐の勅使として（奉幣のために豊後の国の宇佐八幡宮に行つた（折）に、（元の妻が途中の）ある国の（勅使などの）接待係りである役人の妻に（なつて）いると聞いて、（その国で接待を受けるときに）「（この家の）女主人に酌をさせなさい。そうでなければ（私は接待の）酒は飲むまいよ」と言つたので、（元の妻がやむなく）盃を手にして（お酌をしようと元の夫に）差し出したところ、（男は）肴として出されていた橘（の実）をとつて（それにことよせて）、

五月待つ……五月を待つて咲く橘の花の香りを嗅ぐと、昔親しんだ人の懐かしい袖の匂いがすることだよと朗詠したところ、（元の妻は、眼前の男がかつての夫であったことを）思いだして、（己の不明を恥じて）尼になつて山に籠もつてしまつたのだつた。

問1 口      問2 ハ      問3 ハ

問4 ハ      問5 ニ      問6 イ

問7 外界への細心の注意〔9字・15行目〕

問9 懐旧〔20行目〕

問8 人口

問10 執着〔34行目〕

## 【問題】(自習)

出典：島内景二『光源氏の人間関係』〈第三章「壯年以降の光源氏」〉（新潮選書）／オリジナル問題

### 文章略解

『源氏物語』の紫の上は、明石の君との軋轢や降嫁してきた女三の宮との齟齬など、つらい出来事にひたすら耐える。しかしながら、光源氏の妻の一人としてありつけた心労から原因不明の病を得て苦しみ、やがて死ぬことになる。『源氏物語』の作者が設定した一夫多妻のシステムからすればすべての女君が幸せに来世を迎えるはずはないし、それがまた読者に「何もかもがわからない」という「男と女の物語」の性質を際立たせている。

### 現代語訳

対の君「『紫の上』に（おかげられて）は、いつものように（光源氏が紫の上の住む対の屋に）いらっしゃらない夜には、（紫の上はさびしさのあまり）夜遅くまで（起きて）いらっしゃって、女房たちに物語などを読ませて、（その話を）お聞きになる。「このように、世間の（女と男の）実例として言い集めてある昔話の中にも、浮気性の男（だとか）、好色（な男だとか）、二股かけている男に関わっている女（だとか）、そのようなこと（ばかり）を言い集めてはいるが、最終的には落ち着く先があるようなのに、（それにひきかえ私は源氏の君がいるにもかかわらず）不思議なくらいに定まらない人生をおくってきたものだなあ（とつくづく思うことだ）。ほんとうに（このあいだ源氏の君が）おっしゃったように、（世間一般の）人とは異なった運命を持つたわが身ではあるけれど、世間ではとても耐えられず、心満たされないことだとされる（苦しい）物思いもつきまとうわが身のままで、（私の人生は）終わろうとしているのだろうか。何とも生きてきた甲斐もないことだ」などと（紫の上は）思い悩み続けて、夜更けてからおやすみになつたが、（その後の次）夜明け前に（急に）胸をお痛めになる。女房たちは（様子を）お見上げしつつ看病して、「（源氏の君に）お知らせを申し上げましよう」と申し上げるのだが、（紫の上は）「（そんなことは）たいそう不都合なことですよ」とお止めになり、（胸の痛みの）とても我慢できないようなのをこらえて夜をお明かしになった。（紫の上は）お体も発熱して、御気分もとても悪いのだが、光源氏も（女三の宮さまのところから）すぐにはお戻りにならないので、（女房たちも、紫の上の病状が）これこれで、というふうに御報告すること

もない。

解答

- 問1 (エ)      問2 (エ)      問3 (ア)      問4 (ウ)

問5 (エ)      問6 人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身〔23字・17行目～18行目〕

問7 原因不明の病氣〔7字・34行目〕

問8 一夫多妻のシステム〔9字・50行目〕

- 問9 孤独〔29行目〕

- 問10 (ア)

- 問11 (a) ①|| (エ)      ②|| (オ)      ③|| (エ) / (b) ①|| (カ)      ②|| (オ)      ③|| (カ)

解説

問1 『源氏物語』についての基本的な知識の有無を問う問題。『源氏物語』全五十四帖のなかで、光源氏を主人公とする部分は初巻「桐壺」から四十一番目の巻「幻」まで（この後に巻名だけ伝わっていて本文の存在しない「雲隠」という巻があり、そこで光源氏は死去しているはずである）だが、とりわけ物語のメインストーリーを成しているのは「桐壺」「若紫」「葵」「須磨」「明石」「薄雲」「少女」「野分」「藤裏葉」「若菜上」「若菜下」「柏木」「御法」「幻」の十四巻である。この知識があれば、紫の上の死に至る病について語られている本文の内容から、選択肢(ア)「花散里」(イ)「澪標」(ウ)「紅葉賀」が正解ではないと判断できる。残った二つの選択なら簡単なはずである。(オ)「若紫」は物語に初めて紫の上が登場する巻であり、このとき紫の上はまだ数えで十歳である。本文で紹介されている、四十歳近くなった彼女が出てくるはずがない。

問2 現代文のなかに古典の一節が引用されているスタイルの本文を用いた出題の場合、引用されている古典の文章の内容については、

現代文本文で語られている筆者による説明（引用部分の内容についての、本文筆者の解釈）を把握した上で、それに沿ったかたちで理解できればよい。この出題の場合、引用部分直前の「紫の上が発病した箇所は（）不可能であることまでも示唆している」（12行目）や、直後の「紫の上は、物語のヒロインを（）彼女を発病させる」（23～27行目）の部分が、引用された箇所の内容についての直接的説明となっている。この問2だけでなく、引用部分とかかわる他の設問（問3・問4・問5・問6・問11）も、以上の現代文筆者による説明の内容を前提に判断すればよい。この設問の場合、傍線部について「引用された『源氏物語』ではどのように述べられていますか」という設問要求だが、傍線部が「病の原因を暗示する」である以上、引用部分に明示的に記されているわけではない。したがって、26～27行目「その物思いが、彼女を発病させる」という記述が選択肢を判断する決め手であることがわかるだろう。「その」の指示内容に相当する25行目以後の記述内容と整合性があるのは(工)だけである。

問3 現代文筆者の説明によれば、引用部分の「かく、世のたとひに言ひ集めたる昔語どもにも……あぢきなくもあるかな」という会話文は、紫の上が「物語のヒロインを念頭に置きつつ、自分自身が物語的でなくなってしまった結婚以後の人生を振り返っている」はずである。したがって、傍線部「あだなる男」とは、「昔語（物語）」のなかで「ヒロイン」とかかわる男であり、「あだ」の語義「中身がない・誠実さに欠ける」と、「色好み」「一心ある人」と並列されている点から(ア)を選ぶのは造作もない。

問4 傍線部を含む会話文については問3の解説参照。「物語のヒロインを念頭に置きつつ」、「物語的でなくなってしまった（紫の上自身の）結婚以後の人生」についての感慨である。また、選択肢を見れば「つひによる方」が人物であることがわかる。つまり、結婚以後の紫の上にとって「つひによる方」となるべき人物は誰か、と考えれば(ウ)の「光源氏」以外に選択はない。

問5 現代文筆者による説明の内容から考えれば、設問箇所の傍線部「悩みたまふ」は「発病」以外ではあり得ない。その点で「発病」していない(イ)・(オ)は論外。また、「夜更けて」が「大殿籠りぬる」を修飾しているので、紫の上の就寝は「夜遅く」であつて、「明け方（近く）になつてから」寝たことになつてている(ア)・(ウ)は不正解とわかる。なお、完了「ぬ」が「曉方」を修飾していることを根拠とした「明け方に寢た」という解釈は成立しない。「完了」は「事柄の成立」を意味する用法で、特定の時日を意味するわけではない。

**問6** 設問箇所の傍線部は、引用部分の「つひによる方ありてこそ」以下と対応する（問3解説参照）。この部分で、結婚後の紫の上自身のありようについて述べている二十五字以内の箇所という条件で検討すれば、「のたまひつるやうに……宿世もありける身」「人の忍びがたく……もの思ひ離れぬ身」の二箇所ということになるが、「人よりこと（異）なる宿世もありける」では傍線部「物語的でなくなってしまった」との整合性がない。したがって「人の忍びがたく……」の部分が正解である。

**問7** 設問箇所の空欄に入るべき言葉は、紫の上の病氣についての説明であり、直前の「おどろおどろしからぬ病」と対応する内容である。また、本文の展開上では、設問箇所を含む本文30～34行目の二段落が紫の上の病状についての説明となっている。この二点から考える。「おどろおどろし」の語根「おどろ」は、「人の耳目を驚かす異様さ」を意味し、その形容詞の形が「おどろおどろし」である（因みに動詞の形が「おどろく／おどろかす」）。それに打消の「ず」が接続しているわけだから、「おどろおどろし」くはない病氣ということになる。しかし空欄直後に「重い病相」とあるので、「おどろおどろしからぬ」は病状そのものが「軽い」わけではない。とすれば、直後の段落で語られている、病氣の原因と治療（治癒）との関係についての記述のなかの、「原因不明の病氣」が「おどろおどろしからぬ病」と対応する記述と判断できる。つまり、この場合の「おどろおどろしからぬ」は、「人の注目を集めめるような、目立つた原因が想定できない」ということである。

**問8** 本文の展開に注意すれば、設問箇所である35行目以降、42行目まで、現代文筆者による紫の上の発病に至る経緯の解説となつていることがわかる。それを前提に、設問となつていてる空欄の前後の記述を確認する。「光源氏が築きあげた」という修飾句があり、空欄の直後は「の中に組み込まれた複数の妻」であることから、2行目「一夫多妻の男女関係」、50行目「一夫多妻のシステム」が候補となるだろう。あとはどちらを探るかだが、設問箇所が「発病に至る経緯の解説」の部分であることに鑑みれば、「一夫多妻のシステムゆえに苦悩した紫の上」という記述となつていてる後者のほうが、より本文中の根拠が強いと判断できるだろう。

**問9** 傍線部の「哲學的な難問」は、直前の段落でその内容が具体的に示されている。その内容を端的に言えば、「他者との関係性のなかでの自己存在の意義」についての「苦悩」である。これに相当する本文中の漢字二字の語としては、29行目「孤独」しかない

はずである。

問10 傍線部の内容説明の設問だが、それについての説明が本文中で為されているわけではなく、選択肢もすべて本文中にこれといった根拠のない内容である。このような場合はまず傍線部の記述との整合性という観点で選択肢を検討する。この設問の場合、それだけで正解が判断できる。(イ)「病の原因が何であるかはつきりと示」すこと、(ウ)「病の責任が光源氏にあることを明言」すること、(エ)「薄幸のヒロイン」以外の「性格づけ」をすること、(オ)「光源氏にとつての唯一の妻として描」くこと、すべて傍線部の「助け船」という比喩との整合性がない。唯一整合性が保てるのが(ア)「病から回復する方向に物語を展開させ」ることである。

問11 (a)・(b)ともに地の文にある尊敬表現なので、作者紫式部が行為主体に敬意を払っていることになる。つまりは敬語法について間う形の、主語判定の設問である。引用部分についての考え方は問2・問3の解説参照。(a)は、誰が「おはしまさぬ」夜に紫の上が物語を読ませて聞くのかということだが、紫の上のものに「おはします」かどうかが話題になるとしたら、選択肢のなかでは(エ)の光源氏以外はあり得ない。(b)は、紫の上の発病について、周囲の人々の「御消息聞こえさせむ」という言葉を「制したまひ」たうえで「たへがたき（耐え難き）をおさへ（抑へ）て明か」す人、といえば紫の上しかいない。なお、選択肢の(イ)「周囲の人々」(ウ)「付き添いの女房（たち）」は、傍線部が尊敬表現であることを考えても、答とするのは無理がある。

●  
メ  
モ  
●

## 【問題】(演習)

出典：西谷修『戦争論』／上智大学 外国語学部 05年

## 文章略解

クラウゼヴィッツの『戦争論』は史上初の「戦争論」であり、そこに記されたナポレオン戦争こそが〈国民〉によつて主体的に遂行された、史上初の〈近代〉の戦争である。この〈近代〉の戦争は国民間の対立を抽象的なかたちで激化する一方で、主権者としての〈国民〉が主体的に参加する面で抜群の士気を、すなわち〈国民国家〉の威力を示した。そして、のちの世界的な〈国民国家〉形成の道筋となつたのであつた。

## 解答

問1 c

問2 b

問3 c

問4 b

問5 c

問6 d

問7 a

問8 a・e・f・g 〔順不同〕

## 【問題】(自習)

出典：山崎正和『正義から儀礼へ』／オリジナル問題

### 文章略解

倫理觀は不幸にも普遍性を獲得できない。倫理はそれを実践しようとする人間の心の支えを要求する。そこで、倫理を実践する集団を形成し、集団外の人間にに対する優越感をもたせる。また、集団内に競争を生むことで絶え間ない向上心を支える。さらに、具象的なイメージによって、倫理への求心力を作る。かくして、倫理はあくまでも個別・集団的なものになるのだ。また、現代の倫理の混迷状態はこの具体的なイメージの喪失によるのだ。

### 解答

問1 自己の欲望を抑えること　問2 ハ　問3 ヘ

問4 道徳家は自己への優越感と他者への侮蔑を支えとして自己を保つてゐる存在だから。〔38字・解答例〕

問5 排他的集團　問6 閉鎖　問7 ワ

### 解説

問1 傍線部Aの前後は、「自分たちは、他のつまらない者たちとは違うのだ。自分たちは良い生き方を求め、それを実践しているのだ」という思い（「個人の誇り」）が、各個人をして、自分の行いを一定の正しい枠内にとどめさせ、自分の欲望のままに行動することにブレーキをかけさせたのだ、という意味。

問2 傍線部Bは直前の、「あらゆる宗教的戒律が……自恃（自分自身を頼みにすること・自負）に裏打ちされ」と同じような内容で

あることを理解すること。〈人が厳しい宗教的戒律を守り続けられるのは、自分は俗人とは違った、崇高な生き方をする人間などという選民意識があるからだ〉ということである。自分とは反対の、自分よりも劣る人々や階級を想定することによって、生じる優越感をバネとして、自分に課した厳しい自己規制に耐えるというやり方である。

イは後半が誤り。口は、「自らの規律のありかたを確かなものにしていた」が誤り。二は論外。ホは、まず「野蛮人と対立していた文明人」が誤り。実際に野蛮人と対立していたかどうかは問題ではない。また、「自らの規律をつくりあげてきた」も誤り。文明人といえども、いつでも整然とした規律を保っているのは苦しいことなのだが、自分は野蛮な人間ではない、自分が野蛮であることなどあつていいはずのことではないという思いが、文明人をして、文明的な規律を保たしめているのだ、という意味なのである。

### 問3 空欄Cに入るのが、具体的には「優越感」や「侮蔑」に当たるものだということはわかるだろう。したがって、トリは論外。(リ)

の「関わりの意識」は、それだけでは「優越感」にも「侮蔑」にもならない。もしかしたら、相手に対する親愛の情であるかもしれないのだから。チは「道徳的に低い他人への侮蔑である」ということとまったく同じことを、同じような表現で述べたもの。これでは重複してしまう。またヌ「超越的自己」も誤り。「超越」とは、ある事柄や世界を超えてしまうことであり、もしそういう自己を「創造」したとすれば、たとえば、この現世の問題などはもう意に介さない、悟りの境地に入ってしまうことになる。そういう自己には「優越感」も「侮蔑」ももはや消滅しているはず。〈自分の欲望を抑える(「禁欲」)のに有効なのは、欲望を抑えることで内面的に得られる意識——自分は、欲望をむき出しに行動しているあんな人間たちとは違う、優れた人間なのだという優越感や、あの、欲望をむき出しにしている人間たちを見てごらん、自分とは違って、何と醜い動物的存在であることがという侮蔑——である。そして、これらの意識は、禁欲という行いに対する報償として、心の中に生じてくるものなのだ〉という内容。

### 問4 〈道徳家がつきあいにくい人たちである〉理由は、彼らが「独善的で不寛容」であるからであり、このことは傍線部自体に記されている。そこで問題は、〈道徳家が独善的で不寛容であるのは、なぜ道徳というものの必然的な現われ方だといえるのか〉ということになる。この答を求めるには、「道徳」と「独善性・不寛容」との接点を考えればよい。そこで、一方の項である「道徳」を考えてみると、「道徳」＝「禁欲」であり、「禁欲」を支えているのは「優越感」であり「侮蔑」であるとなつてている(傍線部D)

の直前)。そして、「優越感」の強い人は「独善的」であるだろうし、他人を「侮蔑」する人は「不寛容」であろうということわかる。

**問5** 「この不幸な副産物」とあるのだから、答となるものは、傍線部より前にすでに示されているはず。とすると、「独善性と排他性」か「排他的集団」かのいずれかであろう。「この独善性と排他性は、……現われてくる」あるいは「排他的集団を作らせる」という二つの傍点部分を考えると、「副産物」に見合うのは、どうやら「排他的集団」のほうではないかと思われるだろう。そう、答はそれでいいのだ。だが、こんな答の出し方は、小手先のインチキめいたやり方で好きになれないという諸君もいることだろう。そういう諸君には、傍線部の直後からこの段落の終わりまでの内容によって答を決めるなどを勧めたい。なぜならばこの部分は、「この不幸な副産物を生むのは永久に避けがたい」ということの説明なのだから。

**問6** 空欄F直後の、「それを感受しうる人間と……異質の対立集団へと組織せざるをえない」という箇所を考えれば、「排他」か「閉鎖」であることがわかる。また、「対立的な集団を作る」という内容が述べられている第三段落（「倫理の本質は……」）に注目してみると、「閉鎖的（な集団内部）」に出会う。ところで、「イメージ」が「感性的」であるということは、その感性に共感できる（「感受しうる」）人間とできない人間とを組織するということにもなる。つまり、感性的なものは普遍的ではないがゆえに、それを感受し得る一定の範囲の人々とそれ以外の人々とを作り出すわけである。よって、「排他的」というよりも「閉鎖的」というほうが正確である。感受できない人々を退けるのではない。そのイメージは感性的であればあるほど、一定の人によつてしか感受されなくなってしまうのである。

**問7** ル「周囲からの眼差し」が誤り。自分が自分自身に抱く「誇り」である。

ヲ「倫理が神話を伴わなければ力にならない」「神話は個別的、感性的なイメージであり」というのはともに正しい。だが、「個別の、感性的であればあるほど、その神話を感受しうるか否かによつて、集団内の人々を階層化できる」というのは誤り。「感受しうる人間と感受しえない人間とを、異質の対立集団へと組織」するのであって、「集団内の人々を階層化」するのではない。だが、さらに重要なポイントをいえば、そもそも「倫理が神話を伴わなければ力にならないのは」、倫理がいわば官能的に人々を巻き込

むような「煽情的な呪縛力」を必要とするからであり、そのような「煽情的な呪縛力」をもつているものが「神話」なのである。だから、この選択肢は、述べようとしていることが根本的に誤りなのである。

ワ 「禁欲に内在する普遍的性質」とあることで、この選択肢を誤りだとした諸君が多かったのではないか。なぜならば、たとえば「個人にとって、自己の欲望を抑えることは……同志的な仲間の励ましと」、あるいは、「禁欲のためにそれ以上に有効なのは……優越感であり」といった箇所を見る限り、ある道徳（倫理）に従って行われる禁欲は、その道徳を受け入れることができる人々、つまり特定の集団内部の人々にのみ可能であり、その道徳を受け入れることのできない人にとっては無縁なものだということになるからである。禁欲のもつこの性質こそ、この選択肢がいう「禁欲に内在する普遍的性質」なのである。どうか落ち着いて選択肢を見てもらいたい。「禁欲に内在する普遍的性質」というのであって、〈ある道徳に従って行われる禁欲は、万人に受け入れられる普遍的性質をもっている〉などといっているのではない。いかなる「禁欲」であろうと——それが「世俗的、利己的」な禁欲であつても持ち合わせている「普遍的性質」をいつているのである。その「普遍的性質」とは「独善性・排他性」のはずであり、その性質のために「人類共通の普遍的……画餅に帰すはずである」ということは、第六段落に述べられているとおりである。

カ 「相互牽制によつて禁欲を積極的に他者にも奨励していこうとする」が誤り。「相互牽制」とは、禁欲をしている者同志が、おまえが禁欲を破るのじゃないかという目つきで互いに相手を見ることによって、なかなか禁欲を破れないように相手をおさえつけることをいうのである。

ヨ 「倫理が本来もつべき説得力」が誤り。倫理には「説得力」などもともとない。

タ 筆者は、道徳の「独善性と排他性」を道徳が備える本来的な性質だとするだけで、「弊害」だとはしていない。







L3M  
早大国語



会員番号

氏名